

大鹿HeatBeat

第 26 回 ~ 大鹿の人々 ~

紙谷 正 さん (86)



冬の紙谷さんの畑は、敷地いっばいに切った藁が敷き詰められていてそれは温かく畑の神様が眠っておられるかのようです。見た目の美しさにも山里の人はこだわります。画家の堀文子さんは「風景は思想」だとおっしゃいます。彼女によると大正時代まで日本人の思想はあったといっています。私たちが大鹿でみている風景はどれだけ「思想」といわれるものが残っているのだろうかと思えます。1月10日紙谷さんを訪ねると畑の周りの鹿の柵の整備をされて

いました。桑の葉の芽吹きが始まる前にどれだけ臨戦態勢を整えることができるかが重要になってきそうです。



ソムリエの允が帰還しました。夏は鮎釣りで日に焼けた顔をしていたのに1カ月の東京でのお仕事で鏡餅のように白くなって帰ってきました。再び、大鹿村のジビエに合うワインをご用意してお待ちします。鹿の新鮮なお肉が入ったので只今、「鹿の生ハム」仕込中♥

と雪のため滑りやすい。そして前日飲みすぎたよう、ふらつきながら登頂。頂上からは、遠くは、新潟県との県境の山並みもみることができ、おなじみ塩見岳、北岳、赤石岳、間ノ岳などは手を伸ばせば届きそうなほど。



様々なことが起った2011年から新しい年を迎えられたこと感謝します。今年辰年 気持ちちは青空を優雅に上昇する龍をイメージして過ごしたいものです。しかし、私たちに投げかけられた課題はあまりに大きいのもかもしれません。それでも「新たな可能性の年」になることを願い、随神で参りたいと思います。

右馬允 前島家に伝わるお正月の縁起物「宝来山」(ほうらいさん)

米のお山に紅白の南天、松、竹、炭、といった縁起物で風景をつくり、そこに干し柿、栗を飾ります。地域の五穀豊穡を祈願するものです。



~新年号特集!! 辰年のオオシカ人の歩み~

柳沢牧場の柳沢一雄(やなぎさわいちお)さんを訪ねました。



2011年で酪農を初めて50周年を迎えた「柳沢牧場」を訪ねました。経営者の柳沢一雄さんは今年72歳を迎える年男です。朝夕の搾乳と季節ごとの農事を組みこみながら大河原沢戸で受けついだ土地を生かされています。かつては100貫(約700kg)どりの養蚕農家であった柳沢さんが酪農に参入されたの

は、S35年の暮れからです。大鹿村ではS27年に酪農の可能性の模索が始まっており、S34年には、上蔵、沢戸、市場、文満、下青木に集乳所が建築されています。

戦後しばらく地方では、畜産は生活のために行っていました。どこの家にも馬、ヤギ、牛のいずれかは飼われていたといえます。しかし産業化が地方にも進出しだし、農業の機械化が進み、畜産をする家がだんだん少なくなりました。それまで里近くの山では家畜の飼料にするための下草刈りや、燃料としての材木の調達場所として循環していましたが次第にその必要性が無くなり山の機能が衰退していくことになります。そこで当時「山野草の利用」ということで村で推進していたのが「酪農」の普及拡大です。柳沢さんはかつて「くれ木」と「牧畜」で栄えた村の歴史から見ても、大鹿村での酪農に展望を持たれています。他の伊那谷の地域に比べ乾燥しているので牧畜に適しているのだそうです。柳沢さんご自宅の裏の斜面が一面桑であった畑をご自身の事業や必要に応じて作付けしてきました。牛の飼料のトウモロコシ、裏作に牧草、稲そして平成元年からは南天を植えられ現在に至ります。酪農は直接命と向き合うお仕事なので想像を絶するご苦労があると思いますが、18頭いる牛の性格を熟知され、誇らしげにお話ししてくださる横顔が印象的でした。



大鹿スケッチ

2012
新年号
前志満くみ
第30号



南信州の縁起物
お正月、勝ち栗

を頂くのはスタンダード。伊那谷では合わせて市田柿を頂きます。これは「歯固め」といって食べられるぐれることのなく、職に恵まれるようにという意味で頂きます。今ではきれいなオレンジ色をしていて柔らかい市田柿ですが昔は家庭でつくるものはもう少し硬く食べ応えがあったのではないのでしょうか。



故郷の低山に登る①
「二兎山」ふたごやま
2242.7m

伊那谷のあちこちからよく目にする双耳峰です。高森町の農道から眺めると黒川牧場の草原が「ミッキーパーイ」の図柄に見え、その左側にみることでできます。黒川牧場まで車でいけ、そこから2時間ほどで頂上までいけるのでお手軽なトレッキングコースです。赤テープもよく目につき迷う心配も少ないでしょう。今回は長谷に近い大鹿村 儀内路から黒川牧場をめざしましたが、崩落のため牧場までたどり着けず、強行突破。沢筋近くの急傾斜をのぼり無理やり尾根に出ました。ダケカンパの一斉更新により、倒木が多く、落ち葉